守護神ゴーレス

第6話　前編
『戦争のための機械』
WAR PIGS

作：みかつきなお

守護神ゴーレス第6話

『戦争のための機械』　War pigs

桐丸商事東京本社。
桐丸グループの総本山、仮想会議室にて。

沖縄の桐丸重工とともに、グループの中核をなす茨城県鹿嶋市の橘製作所とのハイブロードバンド双方向回線が開いていた。
桐丸商事の林尊文（はやしたかふみ）専務が3D投影メガネをかけると、正面の卓上に橘武丸（たちばなたける）社長の顔が映る。
30代と40代のグループ若手幹部同士の対話が始まった。
「予定外の事態だな、橘君。君の妹は彼の首に縄を掛ける役目だったはずだが。あいつはHA-3を使って追撃にでるようだ。世論をかき回す作戦に出たようだ」
「うちの妹は子守ではない。今、緊急の問題は兼光のパフォーマンスではない。重工製品が管理できない場所に流出することだ。リザードマンの機密は拡散する時期ではない。想定外の事態だ。」
「管理できない状況、管理できない人材。予想できなかった外的要因に責任転嫁するほど、我々は脆弱な存在かね。老人達から与えられた権限を行使して事態を打開しなくてはならない。」
「林君わかった。たった今追われていた葦原常務の娘が誘拐されたようだ。また事態がややこしくなったな、奴らの仕業か」
「そう、あれは《ハワンワールド》ではない。上位存在『ハイエスト』だ。ついに奴らはパフォーマンスをするようになったわけだ。
そしてあの機体、顕龍・零式の姿。常務の娘達が密かに作り上げたのならば、我々が確保しなければならない。あの機体の知的所有権は我々のものだ。誘拐に二つの情報流出問題。我々のイメージダウン。橘君はこの想定外をどうする」
「最悪のシナリオを考えよう。兼光も葦原の娘も関係ない。顕龍モドキも必要ない。奪われたリザードマンを削除する。手に負えない時は自衛隊の作戦行動に関与する。第2局面への準備はもう万端なのだがな」

「確かにそれでいい。だが、自衛権の行使において説明するシナリオが不足している。我々には、作文の時間が必要だ」
「しかし、肝心の葦原常務はアフガニスタンに出張だ。あのおっさん連絡がとれないとは。万が一の事態は心苦しいだけではなく、桐丸のイメージダウンも伴う。早く連絡をとれっていうんだ」
「世界の果てまで桐丸の顔があるのも長年の常務の功績だ。葦原は会社に命を捧げている。娘も前に出て犠牲になる体質のようだな。彼らはスケープゴートもやむなしか」
仮想会議場内に続々と幹部が召集されていった。
メガネを掛けた幹部のシルエットが投影され、薄い緑一色の室内にメガネの上では無数のウィンドウとアイコンが浮かびあがった。
林尊文専務は桐丸の社章、桐に丸の印のアイコンを指差し、空間上で暗証番号を打った。
「では統括委員諸君、ソーシャルオペレーションを開始しよう。計画の第2局面への移行段階に移った。作業を進めながら賢人会議に認証を願う」
工場の面々は誘拐されるみずきの姿にしばらくは皆呆然としていた。
「ああ！　みずきが中へ！」
「どうしよう……」
「舜！　またあの高速を出せ！　ナポレオンの息の根を止めろ！」
「熱くならないで、比嘉さんよ」
「辰ちゃん、中のみずきはどうなるのよ」
「あいつをぶっ壊さないと」
「やりすぎはだめ！」
監視カメラ画像を見ていた小夜子は、喧々諤々の一同に大声で報告した。
「みんないいかな。監視カメラの現状。ヘリアクチュエーター装備の、桐丸の新型っぽいアクちゃんが空から降りてきた。よく見てみて。ゴーレスの足に、あの円盤型が取り付いている」
画面のカーソルを動かし、ゴーレスの足元を拡大した。
「げ、チェンソー出してるやし。大丈夫か？」
辰巳はそれが新作発表会の報道画面で見た、リザードマンSG-11-3量産型のコバルトブルーであることを確認した。
「よし、奴と連絡だ。小雪、通信コード解析を」

「やってる。あ、駄目だわ、これ。『接続不可、ただいまおかけになった当該機体番号はお客様の都合により、送受信することが出来ません』だって。無理ね。やっぱ盗まれた機体だし」

ゴーレスの背後に降りたリザードマンの内部では、荏田が同じ∧接続不可∨の画面を見ていた。

外部スピーカーのアイコンにも∧使用不可∨の文字が、点燈していた。

「まいったな。盗人の使う回線はないってか？　え、貴子ちゃん？」

貴子は突然、朱色の制服ジャケットを脱いで、ブラウスの袖をまくり、荏田の左肩の上から乗り出して来た。

「まずい状態です！　配線をつなぎ直します。ちょっとごめんね」

「な、なにをする。これから動かすぞ、座ってろ」

貴子はドライバーを片手に、左側のボードのねじを回しはじめた。

「だめなんですよ、このままアクターリンク回線が切られていると、外部スピーカーとか動作アプリが使えなくなるんですよ。予備回線から、別ホストでのシステム構築を行います。海賊版を拾わないと動けなくなりますよ。桐丸のシステムは、使用権未払い者には無慈悲なんですよ」

「秘書が自社の海賊版アプリを不正入手か。わかったよ、早くしろ。よくやるな、君は」

「社長の趣味で、秘書課は特殊エージェントなんです。何とかエンジェルとか言われてますけど」

「まったく何やってんの、あの社長」

貴子は話しながら配線を要領よく切断しているが、荏田はどうしても操縦桿を握る左腕に、彼女の胸が当たるのが気になった。

たかがこれくらいのことで気になるのは俺の柄じゃない……。

妹のような女の子の頑張りを肩に感じながら、荏田はすぐさま問題の円盤型アクチュエーター機に気がついた。

ゴーレスはやっとのことで、片腕に巻きついたワイヤーを取り除いたが、もうひとつ、問題の取り付いたバウンドタートルを引き剥がそうと必死だった。

リザードマンは両手を前に伸ばし、その両腕の甲から杭打ちガンの銃口が開いた。リザードマンの標準装備である岩盤掘削とビス打ちに使われる杭打ちガン『ステイクドライバー』を武器に、その照準をナポレオンにあわせ、右手

をバウンドタートルに向ける。
「おーい、リザードマン。どうやってこいつを外すんだよ？」
舜が外部スピーカーに叫んでも、回線接続作業中のリザードマンは言葉を出せなかった。
ナポレオンの柏木は、笑いながらモニターを指差した。
「『助っ人来る』ってか、リザードマン。荏田の奴、ついに俺と勝負する気になったか。お前を正義のヒーローにはしないぜ」
バウンドタートルはゴーレスへの拘束を緩めて、離れようとした。
柏木のけん制はバウンドタートルがリザードマンにも、とりつくかもしれない、と思わせる動きだった。リザードマンは右手を後ろに回して、牽引ワイヤーを引き出し、その勢いに任せて、投げつける。投げつけられたワイヤーが、バウンドタートルをゴーレスの右足ごと拘束した。
「え、何を？」
舜はあたふたした。リザードマンが、ステイクドライバーをバウンドタートルに打ち込む。円盤が機能を停止した。
「荏田の奴、早すぎる。あれがリザードマンの力か」
柏木は舌打ちした。荏田はゴーレスの棒立ちにイライラした。
「なにやってるんだ。ヨロイは素人か？　マシンはインディーズ機体にしてはいい出来だが。」
「荏田さん、できました。固定電話回線です。予備のアナログ無線から一般サーバー経由で連絡できます。通常のハイブロードバンドより、bps数がかなり制限されますが」
「とりあえず黒電話はつながったんだな。それでいい」
「はい、ハッキングしつつ、跡を消して逃げます。ヨロイさんのホストが空き容量を貸してくれるといいですけど……」
「上出来だ。ヨロイのホストを探せ。……あれ？　後ろに戻るの？」
貴子は備え付けのキーボードを取り外し、後ろの席に戻った。
「取り外せるようにしたのか？」
「だって、ちょー狭いんだもん」
狭い室内でぬくもりを共有していたが、それがいざ離れると、妙に寂しくなる荏田だった。
トゥルルルル……。呼び出し音がコクピットに響いた。
「黒電話、かけてみました。あの八幡アクチュエーター重

機。屋上の看板の電話番号です。」
「ハイテクなのかローテクなのか、わからねえな」
荏田は外部スピーカーを最大にして、舜にどなった。
「おい、そこの黒ヨロイ！　今から回線を繋ぐ。指示を送るぞ」
　ジリリリリ。工場内の黒電話が鳴り小夜子が電話を取った。
「はい、もしもし八幡アクチュエーター重機です」
「リザードマンのパイロットだ。ここの工場があのヨロイ型アクチュエーターの工場だろ」
「ええと、あの秘書を人質にして逃走したパイロットさんですか？　いたずら電話ではない証拠を見せてください。右手上げて」
　監視カメラ上のリザードマンが右手をあげた。間抜けな動きに、失笑が漏れた。
「あ、ほんものですね。社長につなぎます」
　一番この場所で冷静なのは小夜子かもしれなかった。
　裕一はインカムから、音声を通じて、荏田と対話した。
「八幡アク重の八幡裕一です。助けてくれるんですか」
「ああ、あの女の子を救い出す。まずヨロイの奴に電話できるようにしてくれ。こいつはホストと回線が切られている。サーバーを貸してほしい。その代わり、新型リザードマンの作業ファイル全部もらっていけ。高く売れるぞ」
「わかった。回線を繋ぐ。ちなみにあれの名前はゴーレスです。ナポレオンに捕まったみずきを助けてほしい」
　貴子がインカムから工場の人間と対話した。
「では、接続作業を行います。いまから信号を送りますからデータ通信を受信してください」
「いいですよ」
　ピーヒョロヒョロヒョロ、ピー！　突然、スピーカーを割るような信号音が鳴り響いた。
「ファックスの音、聞かせるなよ。早く切り替えて」
「へへへ、ごめん。間違えた」
　小夜子が頭を掻いた。
　送られてくるデータをスキャンしてウイルス性のないことを確認して『ウムイ』へと繋いだ。
「さて、ゴーレスとやらのパイロット、荏田広継という。あのアラスカ17のパイロットだ、あの女の子を助ける。俺の作戦に協力し……いや、一緒にがんばろう」
「は……はい」
　データ回線が繋がり、画面に舜の顔が映った。
「なんだ中学生かよ」

「高校2年生です！」
いつも童顔といわれるので、舜はムキになってしまった。
「あ、すいません。上運天　舜といいます」
「わかったよ、舜。よろしくな」
ゴーレスと工場のモニターに、荏田の顔が静止画の白黒で映った。
皆一同、共通のデジャヴの感覚が走った。
「昔、どこかで見た顔のような……」
ステイクドライバーを向けたリザードマンと、まったく動きのないナポレオンの膠着状態が続いた。
「柏木のやつ、なに考えてダンマリしているのか……内蔵の重機関銃をとりださないのか？」
貴子が全方位カメラの画面をチェックしていた。どこからまたあの円盤が出るか。
ソナーと移動体感知装置で監視を続けた。
荏田は、舜に質問した。
「まず、俺から聞きたいことを聞く。どういう仕組みかは知らないが、ゴーレスは瞬間に網を取ってきた。なぜ網だったのか？　俺なら別の方法をとっていた。答えろ」
「荏田さん。あ……あのですね。けん制しようとしたんです。そのために5km北の安座間港近くの養殖の網を取ってですね……」
「5km北ぁ？　信じられんのはおいといてだ、その機能を生かす策を思いつかなかったのか。工場には武器になるものがないのか？」
「掘削ドリルに300m牽引型ワイヤーガン。うちの工場で完成したものはこれだけです。」
「使えるじゃないか！　なんで近い工場に行かなかった？」
「いや、とっさのことで……」
荏田はモニターから舜をにらみつけて拳を前に繰り出した。
「俺達にできることはあいつをぶん殴ることだよ！　接近戦に持ち込めば能力差は縮まる。そういえば背中の棒は使えないのか？」
舜は千代金丸が使用テストをしてないことを気にした。
「でも過剰防衛になったり、中の人がムチ打ちになったりしないかな。」
「昔ほどは揺れない。だれも死なない。そしてお前はまちがっていない。思い切って動け。」

「わかりました。僕は戦います」
「それでいい。俺はリザードマンを奪うために城間さんを人質役にして、そして助けに来た。行動はまちがっているかもしらんが、俺はまちがっていない。そういうことだ」
お前はまちがっていない。荏田の言葉が、舜の胸に響く。
僕はどうして、そんな小さな事にこだわっていたんだ。
「よし、作戦を立てる。ナポレオンが海に逃げないように食い止めておく。その間に武器を持ってこい。あいつの弱点は背中だ。第二段階で背中を攻める作戦を指示する」
「荏田さん。またあの円盤が来たら？」
「うだうだ言わずに早く行け。お前は迷うな。迷うから、行動が裏目にでるんだ！」
「はい！」
舜は後ずさりしながら振り返って工場に走った。
荏田は柏木の通信コードを打ち込んだ。
「久しぶりだな、柏木。お前は人さらいの団体をクライアントにしたんだな。結局『ハイエスト』の犬になったか」
「∧ワンワールド∨とどこが違う？　たまたま∧ワンワールド∨の目標リストにあったポイントと、ハイエストからの指令が一緒だったからだ。二つ仕事を同時にしているだけだ。その分、キャッシュが入る」
「金の亡者め。俺の目的を知っているか？　お前を捕まえるために、組織に潜入したんだ。ハザラスタンでの罪を認めよ。ついにこの日が来たんだ」
「忘れたな、昔の仕事など。潔癖症は死ね！」
ナポレオンの頭部のワイヤーガンがリザードマンめがけて打ち込まれたが、荏田はすばやく交わした。ワイヤーは巻き取られ、再び発射されたが、リザードマンはすばやく攻撃をかわしていった。
柏木らが戦いに夢中になる間、みずきは心の奥に直接攻撃しようとした。
今まで、いろいろな方法を試してみた。動きを止めるクナトの術をピンポイントでかける。私にはできる。
……たぶんだけど。
目を閉じて心の場所を想像する。
イメの渚。夢から異界へのゲート。
みずきは田んぼの中にある寂れた神社の鳥居を思い浮かべた。
鳥居があらわれた。
目的を唱えて鳥居をくぐりぬけると柏木の心のイメの渚

にたどり着くはずだった。
だが、ドーンと激しい衝撃がみずきに当たり、突き飛ばされて頭を強く打ったような気がした。
倒れこんだみずきは暗黒の空間に黒いローブに鎌を持った死神姿の柏木が現れるのを見た。
そして、鎌の先をスカートの裾に突き刺した。
「素人はこまるな。『鍵』をかけてるんだよ。人の喉元から攻めるなんて高等技はもっとうまくなってからやれ。もっとも、そのためにはハイエストの騎士になるしかないけどな」
みずきは激しい動悸とともに目を覚ました。柏木が田中の頭越しに、みずきに叫んだ。
「黙って座ってろ、桐丸のお嬢さんよ。夢の中ならもっと辱めてもよかったかな」
背筋が凍るような感覚を覚えた。好きで常務の娘なわけじゃない……。
お父さんが勝手に海外で仕事して勝手に出世しただけ。贅沢なんてしてないのに。
怖い。お父さんの馬鹿……。
おじいちゃん助けて。
その瞬間、海からバウンドタートルが3機あらわれた。
3機はリザードマンの周りを回転しながら、チェンソーを側部から取り出した。
荏田のぼやきがコクピットに響く。
「なんだよ、あの円盤。AIサポートか？　3台も操るとは腕を上げたな」
「能力をレベルアップすると脳も活性化するんだよ。そしたら、これくらい動かせるんだ。拡張する精神だ。お前は弓矢、俺は大砲なんだよ」
みずきはモニターのウィンドウの一つに釘付けになった。おじいちゃん？
私を助けるために、戦っているのは。
彼女が忘れるはずのない祖父の遺影の軍服姿。短く刈った髪に整った顔立ち。
荏田広継は、葦原茂敏と瓜二つだった。
桐丸グループ統括委員会臨時召集の仮想会議のリンクに、アフガニスタンの桐丸商事常務・葦原敏（あしはらさとし）国際局付顧問が現れた。
3D画像で仮想空間上に実在しているかのような他の委

員と異なり、彼だけが2D画面のレンガがむき出しになった、古ぼけたオフィスの一室からの通信だった。
「うちの娘がこんなことになってしまい、申し訳なく……」
「葦原さん、謝罪弁明は二の次だ。そして君からの情報漏えい疑惑も、ここでは問わない。責任だけではない。覚悟はできているだろうな。いろいろな因果が君の娘に危険を、そして桐丸としての決断がお嬢さんの命より上位になる可能性というものだ」
　カンダハル支社の中古PCに、10人の顔が分割で映った。敏は覚悟という言葉は、このような辺境の地での経験から、今まで自分の生死に関してなら、何度でもあったが、自分の娘がその覚悟にさらされることを、考えたことは無かった。
「覚悟というより、天命です。神が私に罰を落とすのが早まったということです」
　橘武丸は鼻息まじりに答えた。
「世界に混乱の種を蒔き、収益の果実を得てきた冷血な企業工作員も今では凡庸な父か、クリスチャンらしい自虐だな。日本の神は自分の行動で、世界を変えてくれるぞ。それが能力、それが巫術、かんなぎの力だ。我々がテクノロジーとの一体化をめざし、研究しているそれだ。桐丸が世界を手中にするために必要なのだ」
「橘君、葦原君への不規則発言をやめたまえ。最後に葦原君、会社に忠誠を誓ってくれ。第二段階への移行を了承する書面に血判を押してくれ。日本に帰ってからな。我々からは以上。また状況が変わり次第、随時召集をかける」
　舜は工場でドリルとワイヤーガンを取り出し、戦場へ戻ろうとした。
「舜！」
　裕一は大声で呼んだ。
「何？」
　舜はモニターの裕一の顔を見た。
「ちばって（気張って）いってこーい！」
「よし！　やるよ！」
　しっかりとした眼差しで親指を立ててサインを送る舜を見て、裕一は安心した。
　またあの高速が出せる。あいつの本気次第と思うんだ。
　砂埃を上げて、舜はリザードマンの周りをぐるぐると高速回転する、バウンドタートルの上に回転するドリルを突きたてた。みごと一台にドリルが刺さり、後続の二台が追

突する。
　二台は体勢を立て直そうとしていた。しかしリザードマンが2台を拾い上げ、足をもぎ取った。
「やるな、少年。動きがみえるのか」
「え？　いや、なんとなく」
「結果オーライで行く。よく聞け、舜。ナポレオンのポーツマスシリーズは上陸部隊のための機体だ。人員や資材運搬のために腹部に大きな空洞があるために、人間の背骨に全ての動力伝達機構が集中している。背びれの裏側の脊髄をねらう。だが、あいつは戦争のための機械だ。装甲が厚いのは間違いない。そこで作戦はこうだ。おれが飛翔して、上からステイクドライバーを撃つ。あいつも俺に目が入るはずだ。その隙に、お前が後ろ側に回りこんで背びれの一つだけを壊せ。傷が入れば次の段階にいく。間違っても正面に回るな。気を付けろ、いいな」
「みずきが揺れて怪我しないかな？」
「馬鹿野郎！　冷静に考えろ。大事な商品に傷をつけないために、シートベルトとヘルメットで保護してる。あいつが攻撃する前にしとめろ」
「はい。」
「さっきの通信で裕一さんにみせた顔、かっこよかったぞー」
　後ろの席から貴子がカメラを覗き込んできた。
「戦ってる間に、みんなと情報のやりとりをしたよ。君は王様なんだ。そしてゴーレスは最強のアクチュエーター。貴子は応援してるぞ」
　笑顔でグーのサインを出すお姉さんを見て、舜はやる気がでてきた。
「いくぜ、俺が飛翔したら回り込め」
「はい！」
　ゴーレスが陸側、リザードマンが海側に並び立ち、荏田はヘリアクチュエーターのローター回転数を一気に上げた。上昇を始めたリザードマンの前進にあわせ、前進するゴーレスは、数秒の間合いで陸側の防風林の側に回りこんだ。
　あいつは足が短い。この3mの防風林は超えにくいはずだ。スピードが遅い、それが弱点だ。
　僕にでもわかる。それをあの円盤で補っている。陸側なら大丈夫だ。
　ゴーレスは横を通り抜けて後ろ側に回りこんだ。
　上昇したリザードマンは、けん引ワイヤーを振り回して引き付けながら、ステイクドライバーを発射した。

つづく